



## 早苗編の1話～脅迫

---

ある日曜日の昼下がり、早苗はデパートで買った品物の整理をしたあとで紅茶を入れるために湯を沸かしていた。さほど広くない建売住宅のキッチンから茶の間を往復するだけでも鼻歌が自然にでるほど楽しい日々が続いていた。

早苗は来月の10月1日、25歳の誕生日に3歳年上の崎山一博と京都市内のホテルで結婚披露宴の予定だった。その用意のために勤めていた会社を先月退職して今は花嫁修行の真っ最中だった。湯が沸き紅茶を入れて、バックからコミック誌を取り出した時に「ルルル...ルルル」と電話が鳴った。

「もしもし、広瀬です」

「私は私立探偵の野口といいます。早苗さんですネ！」

「はい、そうですが？」

早苗の脳裏には一博の家が私立探偵に調査を依頼して、広瀬家と早苗の身辺調査をしていることは知っているが、なにも問題がなかったからこそ、結納を交わし婚約もしたはずだが？。野口は一方的に話しをした。

「『美人野獣X』の7巻はもうお読みになりましたか？7巻を読まれるということはすでに6巻までお読みになったということですが、本というのは自分のお金で買って読まなければ楽しくないと思うのですが、早苗さんはどう思われます？」

テーブルの上には野口がいう『美人野獣X』の7巻が置かれ今から読もうと思っていた矢先だった。早苗はその質問に返事が出来なくさりとて電話を切る勇気もなかった。野口はさらに、「結婚適齢期の娘さんが、わずか400円のコミック誌を万引きする。これはお金が目的ではなく物を盗むという癖があるということなんですよ！」

早苗は思わず！

「スイマセン、生まれて初めてのことで...今までに一回も万引きはしていません、信じてください！」

「信じる信じないは第三者が判断することです早苗さん。たとえば警察、会社の人、そうそう恋人なんかもね」

早苗は顔面蒼白になり電話を持つ手も震えて声もでない。野口は、「早苗さん、このことを知っているのは私だけです。私は遠まわしに物をいうのは嫌いなタイプではっきりいいます」

「.....」

「早苗さんのように若くて綺麗な人を死ぬまでに一回抱きたいのです、一度だけお相手していただけたら今日のことはすべて忘れます。いかがですか？」

早苗は小さな声で、

「あの～まだ崎山さんにたのまれて私を調査していたのですか？」

「いや～それもあります、私は早苗さんを調査していて貴女が好きになったのです。好きになれば身体がほしい、それだけです」

「そんな無理なことを言わないでください。一博さんに分かったら...」

野口は携帯電話をかけながら話しの整理をしていた。

- 1、 崎山一博という恋人がいる
- 2、 かつて私立探偵に調査されている
- 3、 近じか結婚...早苗はこの私立探偵と勘違いしている

野口は早苗に、

「私は早苗さんと一博さんの幸福を心から願っています。だからまだ崎山家に広瀬家に不利な報告はしていませんし今日のことも報告はいたしません、もちろん私がこのように早苗さんを脅迫している不正行為はバレれば自殺行為と同じですから一度だけでやめます」

早苗は万引き行為が発覚したことの心配よりも、野口に一回抱かれたも本当に後腐れがないのか？さらにお金を要求されて付きまとわれないかの心配に変わっていた。野口も一度だけで本当にこの事を忘れるから心配ないと早苗を説得するのに力を入れている。

つまり、早苗と野口の争点は奇妙にもピタリと一致しているから脅迫というより、駆け引き、商売、腹の探りあいになってきた。

「早苗さん、今日は二人とも結論ができませんから明日また電話はします。そちらの都合もありますから何時ごろがいいですか？」

早苗もついこの商談に釣られて、

「なら、明日の午後3時にしてください」

電話を切った早苗はなぜ、簡単に万引きを認めてしまったのか後悔をしていた。この日は朝から心がワクワクしていた、それにデパートではほしい物が安く手に入り、また学生時代の女の友人とバツタリ逢い喫茶店で一博のことを自慢していた。

自宅近くでタクシーを降りて本屋に立ち寄り読みたかった『美人野獣X・7巻』を見つけてラッキーと思いレジの方を見ると2～3人が並んでいてレジの店員からはこちらが見えない。もう一人の店員も奥の事務所にいた。早苗の周りには人がいない表の歩道にも人が通っていない、今なら万引きをしても完全犯罪だとフト思った瞬間に手に持っていたコミック誌をバックに入れてしまった。

店を出てからさらに完全犯罪を装うために本に差し込んである「注文カード」をバックに指だけ入れて抜き取り、片手でシワクチャにして路地を曲がったところのゴミ箱に捨てた。そして後ろを振り返り誰もいないのを確認してから家まで歩いて帰ってきた。それから30分もたっていないのに野口から万引きした本の題名から定価まで言われたショックで言い訳が思いつかずアッサリ私立探偵の野口のペースに早苗ははまっていた。

それにしても結婚の日取りも決まっているのに、まだ崎山家は私立探偵を雇い私を監視している。もちろんこれは一博の意思ではなく両親の差し金だが不快な気持ちになった。下手に一博にこのことを相談すれば藪蛇になるから言えない、さりとして早苗の両親にも弟の寿男にも言えないと困り果てていた。

婚約者の崎山一博は、大手の自動車販売会社の営業部長をしている。早苗はその部下でいわゆ

る社内恋愛ではあるが、一博の祖父はこの自動車販売会社の創設者で大手メーカーの販売会社として全国一位まで業績を上げた伝説の人物。現在は一博の父豊吉が社長をしている。いずれ一人息子の一博が社長になるから早苗は社長夫人の地位が約束された玉の輿だが、ここまで行き着くには一博も早苗も涙が枯れるほど苦労している。

早苗の父親は京都市バスの運転手、母は近くのスーパーでパートで働いている。弟は23歳で高校を卒業して早苗と同じ会社で修理工として働いていたが早苗との婚約が決まると同時にサービスフロントに配属され主任になった。

崎山家と広瀬家では月とスッポンの家柄の違いで崎山一族はこぞってこの結婚に反対していた。広瀬の両親も娘が金持ちの家に嫁いて苦労するのは目に見えているから反対したが、一博が毎夜のように家にきて、

「僕が早苗さんを守りますから安心してください」と両親を説得。そして自分の両親と一族に早苗ともし結婚できなかつたら会社をやめて二人で暮らすと言い切り男らしさを見せ、来月の挙式を待つだけになっていた。

28歳のスポーツマン青年、一博は現在っころしく恋人の早苗には頭が上がりずやさしかった。デートで酒を飲んでも歌を唄っても気品が身体の周りから離れず光って見えた。早苗も色白でほりの深い顔がエキゾチックで大人のムードと上品さが一博の気品とマッチしてどこからみてもいい男といい女のベストカップルになっていた。

今日の昼間、コミック誌を万引きして男に脅迫され身体を求められ困っている女だとは誰も知らない、早苗は野口の脅迫電話の後急に一博に逢いたくなって電話をしていた。

この二人は付き合ってもう2年にはなる。早苗も一博も一目ぼれ感覚で一博は早苗を私設秘書のごとく会社関係のパーティーなどにも業務命令として誘っていた。ある時、地元の代議士が大臣になりその就任披露パーティーがホテルで開催されていた。その一博は急に早苗を恋人だと紹介始めていた。それを聞いた大臣クラスの政治家や京都府知事、市長まで早苗を見る目が変わったが、早苗は極度の緊張でバタリと倒れてしまった。

一博は早苗を太い腕で抱き上げ、黒服の係に「部屋と医者」といいながらパーティー会場のど真ん中を突き抜け行った。

8階のスイートルームのベッドに寝かされ、医者の診断を受けたが別段悪いところはなかった。極度の緊張から貧血を起こしたということで早苗はすぐに元気を取り戻したが、一博に看病のお礼をいう気にもならなかった。

「部長さん、どうして私に相談もなく私を恋人などとあんな偉い人達に紹介したの...」

と怒っていたがそれが泣き声に変わろうとした時、一博の大きな体がかぶさってきた。早苗は必死に抵抗したが、一博の手が早苗のパンティーの中をまさぐり指に愛液の感触が走ったころ早苗がおもわず、

「部長さん、結婚していただけますか？」といつも思っている言葉を口に出してしまった。一博も大きな声で、

「はい、早苗さま、結婚してください、お願いします」

一博はパンティーの中から手をだしたその手で荒々しく早苗の着ているものを脱がして上に乗

ってきた。早苗はスイートルームの豪華な灯りが気にはなったがそのままされるままにされていた。

一博は童貞ではなかったが素人の女とは初めての経験。今までは高級ソープに通い欲求を満たしていたが、それはソープ嬢からの手取り足取りのサービスであって快感は最高だった。しかし、一博は女性に対してのサービス、つまり愛撫の経験はなかったから早苗に対してもただただペニスを早苗の秘部にくねくね差し入れることしか考えていない。

早苗は処女でまだ十分濡れて濡れていないからなかなか入らない、それでも愛する早苗の秘部にペニスを当てているから快感は全身を走り回り一博は挿入しないまま爆発していた。

早苗の秘部の周りには白い液体がヌル〜と張り付き、それが下の黄門のほうに流れ落ちるのが気持ち悪かったが一博が早苗の身体から降りるのを待った。この夜、一博は早苗の処女膜を破るのに3回のセックスが必要だった。その後も一博とのセックスはこんな調子で早苗はまだ一度もセックスの快感を経験していないもののセックス以外の一博はとても好きだった。

午後3時に約束の電話が鳴った。

「もしもし、早苗さん、いつ？デートをしていただけます？」

「そんな〜困ります」

「それではありのまま報告します」

「野口さん、私が万引きした証拠でもあるの！」

「はい、あなたが捨てた注文カードに指紋がついています。私はそれを保存しています。それに昨日の電話では貴女が万引きしたことを認めています、その会話のテープもあります」

早苗は野口に少し抵抗したが、これは役者が一枚も二枚も上手だった。そこで早苗は、

「野口さん、それではお金で解決していただけます？」

「それでは犯罪になりますからお金はおりません」

「犯罪に...でも私の身体を...これも犯罪です」

「早苗さんを愛しています。愛していれば当然身体がほしくなります。これは男と女の恋ですから犯罪ではありません」

「そんな、私には婚約者がいます。いやがっている者に身体を求めるのは犯罪です」

「早苗さん、あなたも犯罪者でしょう！」

野口は声を荒げてまくしたてた、早苗は泣いているが、ここでやさしくすれば女は付け上がる動物だということを知り尽くしている。さらにヤクザ言葉で早苗を震えさせていた。

(早苗編の2話につづく)

★～私の小説で自己破産をテーマにしているのがあります。これは主人公を女性にしていますから少しH系ですが、自己破産までの流れが書いてありますから参考になります。とりあえずは裁判所に走りこめば今月からの返済はストップできますから自殺というような最悪のことはなくなります。ぜひ、読んでください。

長編小説「京都フラワーランジェリー物語」

<http://p.booklog.jp/book/16636>

短編小説100連発

<http://p.booklog.jp/book/16691>

老人と性「京都タクシードライバー・さくら」

<http://p.booklog.jp/book/16816>

7人の天使の恋の物語の「美雪編」の1話は、

<http://p.booklog.jp/book/16980>